



208  
2  
697



国立国会図書館 高野薙髮刀 2巻 208-697

ガラス使用



石川屋 米儀

序 高野薙髮刀  
喜のりの道 然るまじく角額  
優乃 書きよしきくしこふ  
とくあかしくおまけりてなきよし  
花つりて嬉れたるのこゝろて悪をこぼ  
善ふすむしきしきるるるるるるるる



小枝繁老人著  
高野薙髮刀  
蘭齋島北高馬

梓閣星衆



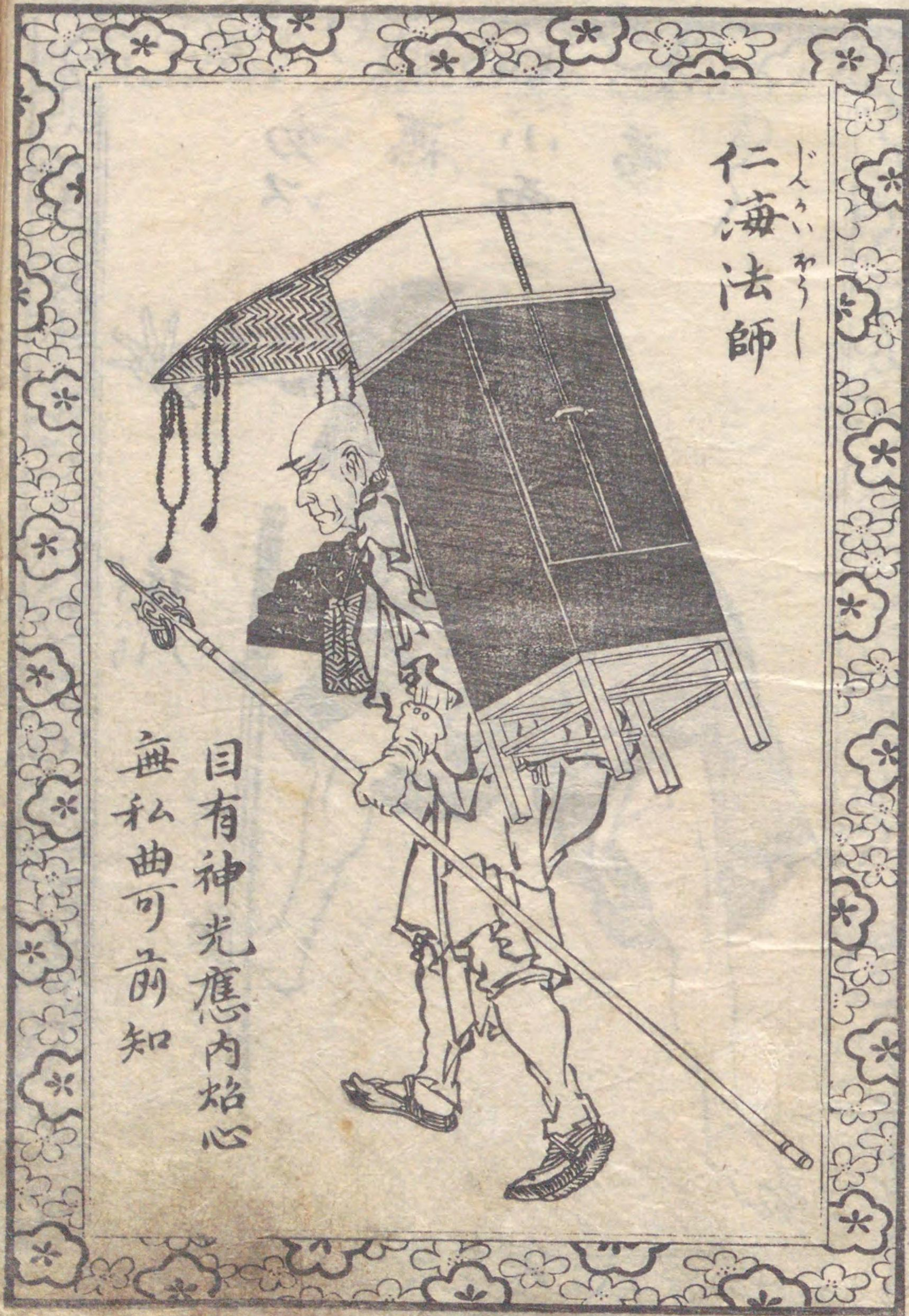


少一へ髪を剃る事なれども  
もたき事ハ念ハル事ナラズ  
はちちへ髪を剃る事ハ  
くしへ髪を剃る事ハ  
じへ髪を剃る事ハ  
らへ髪を剃る事ハ  
ちへ髪を剃る事ハ  
あしへ髪を剃る事ハ  
ちへ髪を剃る事ハ  
ちへ髪を剃る事ハ  
あしへ髪を剃る事ハ  
ちへ髪を剃る事ハ  
あしへ髪を剃る事ハ

少一へ髪を剃る事なれども  
もたき事ハ念ハル事ナラズ  
はちちへ髪を剃る事ハ  
くしへ髪を剃る事ハ  
じへ髪を剃る事ハ  
らへ髪を剃る事ハ  
ちへ髪を剃る事ハ  
あしへ髪を剃る事ハ  
ちへ髪を剃る事ハ  
ちへ髪を剃る事ハ  
あしへ髪を剃る事ハ  
ちへ髪を剃る事ハ  
あしへ髪を剃る事ハ







仁海法師

目有神光應内始心  
無私曲可前知

今やまはるかに  
 のちをいふ  
 美ふをさ  
 文化の  
 小枝  
 碑



勿以善小而不為



雪路ゆきぢ

勿以惡小而為



強つよハち





於梅



紅粉美人愁  
未散  
清華公子  
笑相邀

柔介



高野薙髮刀總目錄

弟一 二虫の情劔小着て妖祟をなせ

弟二 孝婦子を捨て母を養ひんとて

弟三 旅僧大士岡小刺児拾ふ

弟四 寡婦娘と貧く禍を醸せ

弟五 怨心鬼蛇とかつく好夫を苦まじ

弟六 二兇謀小陥されて不義の名を禀

弟七 母子奇遇して仇敵を討

通計七話

於年女 高野薙髮刀卷上

東都

歎醵間士編

弟一 二虫の情劔小着て妖祟をなせ

今ハ昔文安の頃るとよ相州山内の邊小虚六平正秀と云へ

る鍛冶あり奮ハ赤松家小仕し武士たりしと縁故あり

て致仕此録倉小母方の血属たる鍛冶あると傳ふと使こ

まへん事て暫くころ小ありたり然る小此鍛冶男兒を

一人の女兒をとりしと年紀虚六平と似合しなるや

ふ終小これと娶親子の義を結ひ一家睦て榮也に

高野薙髮後の上

六



歡めし哀しめる人の世の習い少て教程なく男辞世つ  
も一家の悲嘆大なるかばひなき野辺の草として居  
虚六平ハ箕束衣を嗣専ら鍛冶の業を做小き素此家  
ハ是五郎入道正宗の庶流なりとも世移人下ぬると云  
虚六平ハ素武士たるを年長く此業を習受せぬ也  
先祖小を似るべしもちて遠小劣けるをどに其名も世小使  
つぞ家も貧くぞありたりと云ふこと此虚六平が性直やう  
小して聊も貪る心をなく一人の養母小仕ゆる小よく孝の  
道と云ふぬ妻ハ小菘と叫ば麻小そふ蓬と云ふ

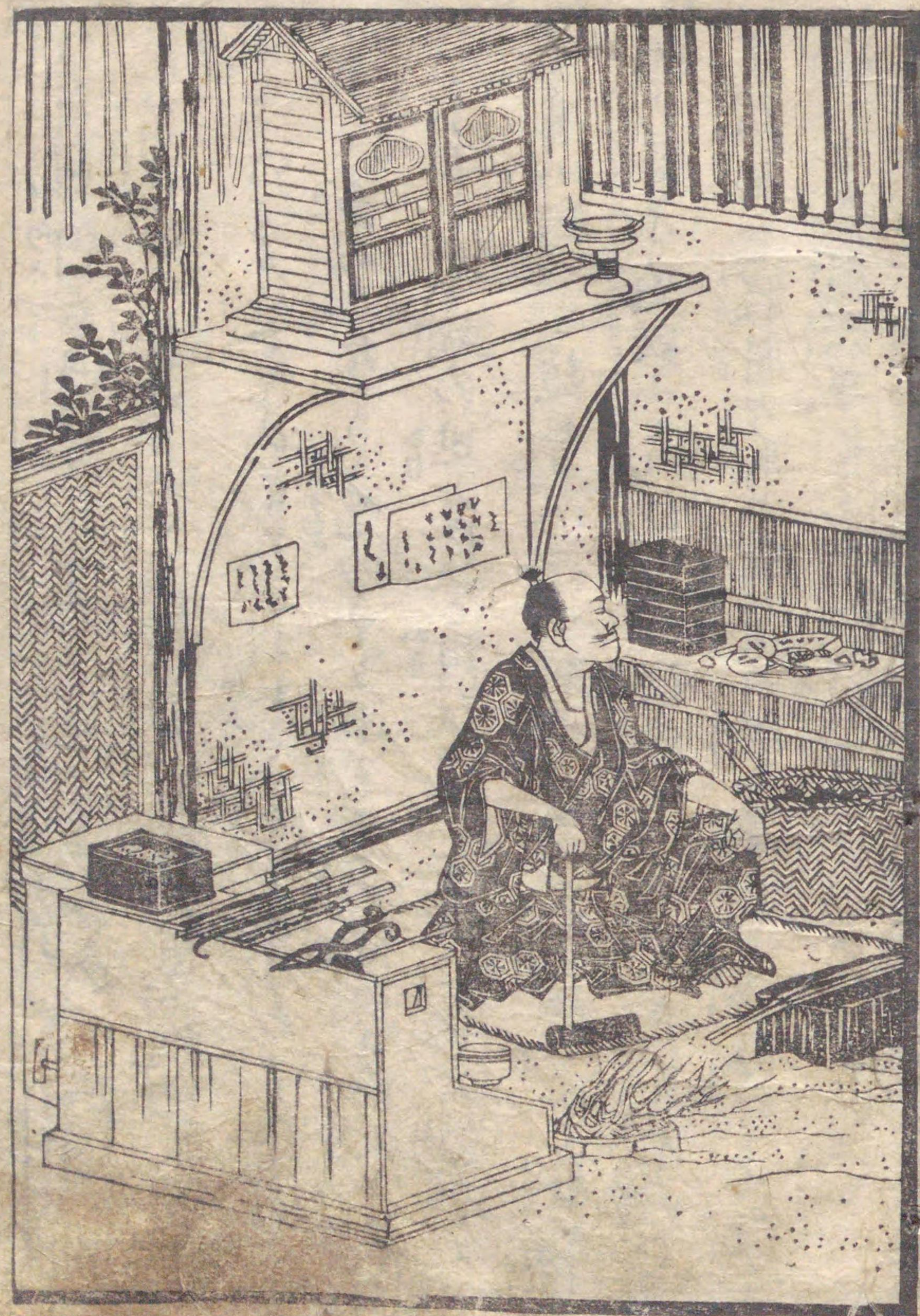
常言のことく其容貌醜うぬのこころ心もなやばら  
母小仕ゆることハさうちり夫を敬ひ婦道を守りたる  
ハ夫妻の和睦しうして一人の男児と設けぬかき夫  
婦ハさうあり母の喜ひ大なるあり只是挿の花堂中  
の玉とぞ慈愛なりと云ふハさうあり虚六平ハ我拙工  
ホして先祖の名を下さんことをおそし朝まのこころ  
ヒタ小及まして生業のこころ小悔念を励みたりある  
も一免はく一技の短釵を作らんと只顧鍛冶あり  
ある庭とせの松枝小一匹の鯛蟬りと喧さる小鳴は

高野薙髮刀

ガラス使用







蠶の情  
と  
の  
情  
と  
の  
情

高野薙髮刀





高野薙髮刀 2巻  
るを偶仰と見よはるの木根より一匹の蜻蛉と取  
ん光景めて谷ととてけく穴規ひ寄るを蜻蛉ハちのまを  
害さんとまふまのわりと夢小だもあぬと海ゆい  
ゆ〜声のりたて〜鳴り〜る小ぞ虚六平あるや危一  
いふりして鯛の逃よじと想ひま〜只今治へる真最中  
ちのまハ鯨糸く植打しけ〜眺めり〜るちをやくと蜻蛉  
鯛の腎小迫既小飛就ふと猛然として想ひ手小持て  
る鍔植を投付々ハ蜻蛉も鯛も植小中微塵小ちつと  
失小なり虚六平と〜えて心け〜と〜いふ小畢竟二匹

の虫の俱恙をうんことを想ひた〜如也小及びよし  
かき殺生志は〜ることよと極〜しけ〜作りか〜刀ハ  
終小鍛得ぬとて其翌日小ちりて此小鍛〜短劍を  
あ〜研して着る小此年頃炭詩の刀劍を作りしと這  
劍の如く金濃〜して艶を〜ハ一扱もちりま〜れハ  
大小弄ひ上エの研師を雇ひ磨〜り小実小明晃り  
として玉りるを〜りある上品の劍とちり〜るが怪哉  
焼刃の紋小蜻蛉と鯛と争へる形鮮小現れ〜不〜虚  
六平甚不審想へらく我此劍を治〜し〜此蜻蛉と

高野薙髮刀 2巻

ガラス使用





鯛と争を見と想と以留心りていそれ小やよりまさ  
劍ハ素殺伐を主る器なれハ彼鶴鯨の殺氣小あや  
あるとそあうく小劍の徳の尊ふとからん祥ちあらん  
いざや此劍の切味の石とを試とをやとそれより変七  
ハの物を様一とる小剛柔の差別る斬るふとふ  
只是爪を割りも易ううく小ぞ虚六平かどりか  
弄びこる我農祖五郎入道よの治めくる劍少あそく  
方るまじと深く秘蔵して置小たり真小まて山内  
強ハと叫做的あり素ハ農夫少く富るものありしと

其性強欲小して酒色博奕を好極り無頼の悪俗  
ありしと小親より讓稟し由宅貨賤ハ酒色や衰彦  
道一の鳥小悉く失ひ今ハ博徒とあり又少く力量あれば  
相撲とり自ら任侠ありと稀一近き多きの少年と欺  
き色白紅緑の奸計として銭財を貪りたりとる小近  
頃虚六平不思議の良劍を治しと人の風声よると  
て忽ち虚六平よりと小至り劍を着ことと望小虚六平  
ハ秘蔵の劍ありハ漫小人小見せんハ心より稀とば  
悪棍の強ハあそべ後日いさちる仇とぞ做らんとやむこと

刀中がま





ちりて見ゆる小強ハ喜びその劔をうりやへり好く着  
小晃々たる光を只是明鏡の面のごとく焼刃の紋ハ光  
彼の溢小似くそのうち小鱗鯉と鯛との象解小見たる  
うらまゐるごとくあねも心裡小甚く讚美頻小好り  
く想ひたるはらうかへを索る小虚六平一見を評せよ  
教許のごとく思つる小今まをて往んともせよ小ぞか  
中巻るといへども難面くい日んハ後のことといふんある也  
教分りの慮を凝し詞をかやふ小冊劔少深さ縁  
故あまハ漫小他小興へりしと漸々小言説く強ハ

をまじし飯志り今ハ斯く止も好智深き強ハ後奈  
何事をし做すハ後の巻を讀得く知ん且説虚六平  
う這劔惜るるハその身故武士あるを今茶落居と  
ば人の侮り輕よるを易くぬこ小想ひいふ小として昔  
の武士とるつたなんその紙をかきひけは然るる也  
劔たうしつとあを深く惜たりわることとをバハ中  
小秘め置密小その使を索るうら此程めと風のうら  
せしねとふ一日二日うら所ありしが何を料るべき漸  
病をもやふたうしめゆる小ぞ渾家駁馬ままといふ東西





の醫師いしやを招まはす薬やく劍けんさめく小用ちゆうゆきと露つゆくもり乃  
 驗けんもく祓はらむと六何ろくなんとせん神かみ小仏せうぶつ小祈せうね只顧ただかん病びやうの  
 おこしんことを願ねがはる此折こゝろ折おり一日いちにちの夕晚ゆふばん一人ひとりの猿さる  
 僧門そうもんを小姑せうこ云いへり云いへり負道せうだうハ陸奥むつへまう高たか  
 野沙門やしゃもん少せうてんが今日けふも日暮ひくれて宿やどるさ方かたな一いち隣りん  
 一夜いちやの宿やどを惠めぐみんとを小せうととより善根ぜんこんと事こととせふ  
 家いえをハ母ははたり出でて云いふ此こゝろ不ふ主しゆの病びやう小せうより破生はせいの草くさ  
 屋やの荒あはれもてさ甚いひハ格かく戯ぎさ小せうまりまづ物ものごと  
 うろくしかつどことらのことごとく小厭せうえんめをぞい遠とほ裡ぢ

小入せうにりせめくと聞きらゆる小僧せうそうハ赤あかい裡ぢ小入せうにりは母ははハ一室いつしつを  
 する処ところの塵ちりを拂はらひさ小いさあひ食い事じよりして何なんれ  
 おられのこととまめくまう款待けんたい小せう僧そうハ深ふかく赤あかい篤あつく  
 謝あやまりて后主のちあかの病びやまのやうを問とふ小母せうぼ細こまゆふその光景あうご  
 を説話あひだを僧そう熟じゆくくとうら聞きそふさこそ物憂ものあうくお不  
 せらん今宵けふい宿やどりの報むかひ小せう法ほふ力ちからつてなすといへども高野たかの  
 大師おほしの流ながれを汲身くみみをれを精しやうの限病かぎりびやまのをさるつた祈ねが  
 をつていふいと虚六平せうろくへい枕まくら辺へ小せう往ゆてまうくのことと云い  
 云いふゆれハ虚六平せうろくへいこね代謝しろとくく祈ねがられと





あゝ小僧心を得てやがて香と薫念珠をほめては  
 久しう祈る后又真言の秘文を唱へ双眼を用ふこと  
 一盞茶時ありて愕然と教響嗚呼這病ハ尋常小あ  
 らま正しく物の祟あつて惱むるものなり早く除  
 うされハ命もあつて危あつてと云小虚六平教馬  
 そハ何の祟小いやと問へ僧答く云今真言の法  
 小よつて好く観むる小此家小殺氣満て其障怪  
 最甚し是武門小ありてハ刺客なるもの忍て宥規ふ  
 の兆あり足下ハ治匠少ておとせたりとい其縮ハある

る小あつて想ふ小妖劍ちかく貯めたるありて祟ふ  
 做くとおちゆれ劍ハ素殺氣あつて此兆ありも理ち  
 且若想ひ中するつゝ劍あつて他小出して災を攘  
 りくと説示せば虚六平心裡小的當し是くあつて彼經  
 刀の所為なるんとも想ひけれども僧の言葉のあり  
 り小的中也不思議さ小少く疑想ひたるハ秘り置  
 たる短刀ハ前日強ハ深く望しを興へたりし彼奴我  
 病めるとを窺ひ人を雇ふて斯いそしむる謀も志る  
 へつて然るるとは他小出して益なきものもあつて





高野薙髮刀上

十三

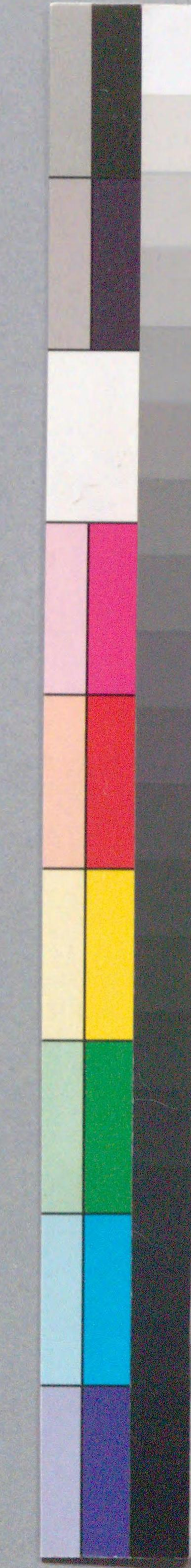


ちりく小欺あざむれ一不覺みづかそのよと人小背指うしろさしさうもんも惜あや  
 しとさわぬさふて云いりなるハ師父いその命あやせさるハ  
 とあるべけれど我家わがを負おつして塵ちりごりの物も貯たくわへ  
 ぶら衾かど奮うさ家いなりハ床あの下塵きごりの底そこな  
 小劔つるぎなよの理うりどあるなうも斗たられ衾かを翌日あした  
 とく搜索さうさヤへ一今宵こよみハ夜も更かくハ小旅この疲つかれ  
 ちりせらんまづく寝いねをせりハと妻つま小むいそも  
 とあしハ妻心つまこころを得えく僧そうをバ一室ひとむなる知小寝しる一ハ  
 けく母ははと諸共もろとも小虚六平こよろくへい小對ひらひて云いらく今宵こよみ僧そうの

宜よろくハ劔つるぎハ嚮むか小治ちありハ短たん刀とうハてやあつべ一是これまで  
 些ちささりの物怪ものみもなうやハ小彼劔こと治ちありハ程ほど  
 ちり病やまありハ他ほかと搜索さうさまごもなる一明日あしたと彼短こ  
 刀とうを賣代うりしろなる一薬くすりの價あ小志しありハ是これ両りやうさうハ良よ  
 を得えべしと云いはれハ虚六平頭こよろくへいをうらあり声こゑ  
 密ひそて云いハ此事このことさうハ做おべくハ今いまの世よの浮屠うきずハ俗ぞくより  
 も心賤こころいやハ利りを貪ねむことハ蠅あの血ちを好このむことハ我家わが  
 旧ふるき治通ちとちりハ必かな先祖せんぞのうら治ちハ名劔なを益えきおく  
 うと想おもいさうハ奪うばんさうハ術じゆつもさうりさうべし

高野薙髮刀上

十四





もとさう小聴こきつづねつづねねおねお母子かよとハあまをまままといひ  
ここららととひひををしし胡こ乱らんののここらら云いひひをを用もちああしし高たかし  
野や大だい師しハハ今いまもも尚なほ諸しよ国こくをを巡めぐりりのの人ひとのの善ぜん不ふ善ぜん小こより  
振ふくくのの冥みやう助すけ冥みやう罰ばつをを施たづなひひぬぬといいればれば必かならず乎や誘よひ  
むむとと志し多たふふかかとと各いろ色いろ小こ諫いさむむれれがが虚まよ六ろく平へいああざざとと笑わらひ  
ひひてて云いふふここららハハ我われももけけれれどどそそのの淨じよ賣まい僧そうのの空そら言こと  
小こしてして婦め女に子こをを鴈かりうう利りとと貪むのの使つかたりり人ひとのの禍わざはひ  
福ふく死し生せいハハ天てん小こありりいいづづ無む情じよのの器う物ぶつ小こしてしてよよくく人ひとハ  
惱なやむむとと聊いさもも肯かむむとと母ははとと妻つまととハハ甚い淺あ穢け穢けくく

悲かなしくてして尚なほ數かずくく諫いさむむとと后のち少すくききけけやや返い答こたせせるるももせせぎぎ  
るる小こ漫まん理り會かいてて歌うた小こ々々斯さくく其その夜よもも明あけけとと横よこ雲ぐも  
東ひがし小こ々々かかむむるる時ときありり僧そうをを起お出だすす昨きのう夜やよりりのの礼れい  
ををのの虚まよ六ろく平へい峯ほう家けのの小こ對たいひひ主ある翁いのの病やま深ふかくく  
心こころをを痛いためめああふふとと小こハハああららとと負お道みちりり言こと葉は休やす  
用もちひひああららとと命いのちののほほどどももいいづづああららとと好よくく捜たづししよよ  
ししああららとと叙ぎああららととああららととくく他ほか小こ出だすすとと然しかららしし  
ととささのの病やまハハ傾かた小こ愈いふふとと細こまやや小こ云いふふ教くわへへ別わかれれをを告つ  
出いで去さららとと

高野薙髮刀





第二 孝婦子を擗く母を養ふんとせ

且説虚六平が母と妻との高野沙門の詞を篤く信  
 じうもく諫むれども虚六平が命今年小限ぶ  
 因縁少やありん日頃ハ頑なることぞやくことぞ  
 ら母あづの云ふことハ露むらり來ることかうりし  
 這回のこととをさらふ肯引ぞ今ハ漸く病も重  
 心神惱乱て頼も少く見へられハ母子ハ嘆きまほし  
 食をも忘れ跡や枕小寄りしてぬ保おろけたり  
 たり此時虚六平ハ重き枕をあけ母小對してあそ

とらくと儘今ハや黄泉客となりぬづかむ鳴  
 呼不孝の子ハ一期も養ひ果しあつて先づ  
 こそ甚心苦しうゆへとも生者必滅の世のちる詮  
 申べやうと事小ハ小子がとらハ露むらりも悔  
 只く老を養天年を保んどめくと云く次子妻  
 云へりたるハ我亡あふてかんニ女の身をよて母  
 と幼児とを養育とを難るべけれといふもよし好  
 養てたゞよ是ぞ千万部の經陀羅尼よりいさ  
 小増り一回回ぞうこそままでいおんをゆも

高野薙髮刀

十六





隱しはもととも今聞へりたり我昔ハ武士の數あり  
いりし身をりしと薄命にして落しとらん  
父憐みて吾をば此家を嗣し免れられたれど  
天命免れずして貧小苦まじと高恩の養母ハ  
養ふ小心のまじと断てらんも口惜くいう小もして  
故の武士小ちり母人をばめおこら小栄耀の樂を  
棄てせんものをとおふ折りて彼短刀を治得たり  
この天我望ととげりあのみ詳ちりめとてとて深  
秘置て他小出まを惜く高野山門の詞を聽

ぞ命を短する小至らと我手小作し刀の我小禰  
もハ自業自滅の因縁をば短刀の崇とて我  
の心て止ぬり一ちりあがば没後ハ劔を藏置て  
鬼の生育の危我志を嗣で武士とあしあは佩  
さやまへが一是ホのこととや外小云べことといわ  
れど彼是のここと心むれ仏化と得んことと賢東  
なり鳴呼心苦りや南無阿彌陀佛と唱ふる声と諸  
とも小終小をうたをありらる小を母と妻とハ一  
小控と跡小まらりしと泣まるとそ道

高野薙髮刀

十一



凡世かまそよの中なか親かや子こ夫やう婦ふの離り別べつるど哀あはれふ悲かなさはか  
さふましてや此こゝろ曹そうのう只ただ虚むな六む平へい一いつ人ひとのちから力ちからをとりて飢ひ餓がの  
愁うらぢいなく今日と易ふ送りし今いま斯かくあへかくこひ  
ぬらば正ふ是暗や夜よ小こ燈とをうち消し沖小こ漂たふ海うみ士し舟  
のつ楫かを新る小均ひとく愁傷こころ壁かも小物ものをくてありる  
を日頃ひ親ひたく睦びる近ちかさきのひと人ひとと會集あはれまて多  
方か小こ云いをくさらち備やく野のの色いろの送を做しふり斯  
て累七ななの日も經りぬれど母は年とし老おいし身の杖も  
柱はしらも想へる子こ小こ後ごとくく行末ゆゑのこ事ことを想ひ

まらる小ほけけてハ己余の長ながを恨袂たもとの乾く際もかく  
くく嘆なげきるわらふ遂小こ眼めと突瞽こらしものこ心こころさ煩  
ハ志うたうて此み程ほどハ重き病とたりる小こハ孝子この小な  
ハ夫小こ後ごとく後ご衣ころもの杖いまくくらるふ今又また母は乃  
重おもき病小こからぬめる小ぞいよく心こころままいい歳とし許ゆるの哀  
ししを増し薬餌いハさくたりちさぬことさく只ただ願ねがひの  
病やまひの悔らんことを願ひとこらりぬたふを負しま家いちる  
とこらははらいさ凶し事ことの重りぬれば母はの病と助んと  
さる費つひをく家いちるわらいぬそのハ渾み代しろをく茶ちやの

再野新身力

十七



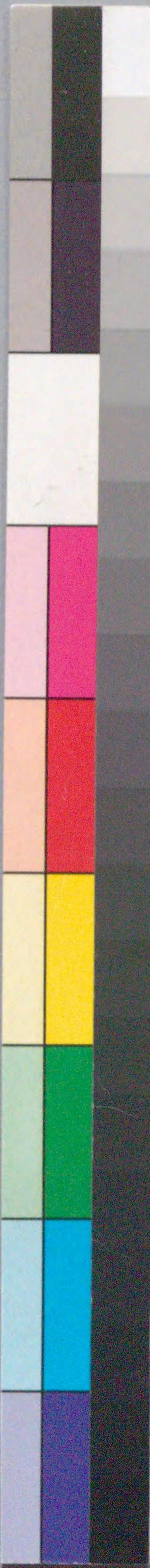


價とありはるし今ハ朝夕の烟も絶くぬちあるめしや  
 小菴少も孝養の道と衰とそその身の針目結の  
 單なるを纏ひ幼見をば背小肩夢うも機織たとして  
 些むつりの賃綫ととつりつて母の暖小着飽  
 まで小食一めて仕ゆること一年小あまうりつるまて近以  
 母の病をとり不重やふたういふことふや些うりぬけ  
 残一齒の悉く口ひらるほぶ小食まるとそそ入叶をまを  
 了ふりり小菴ハ此光景と看て甚哀しく貧一とさう  
 甲小百折千磨して日頃嗜める柔らかなる物を求りて

初しほど是たも清やく食ぞなりゆなるめぞ斯く  
 ことなむはとく命も老ふらんと心と苦しめたるが  
 餘りの没理會小己が乳を咽へ見る小これのそそ其ん  
 一服つとつ小菴少く心ちらぬ只顧進め吞めなる  
 然るふおの子今年二才ありていまも粒食せざるを斯母小の乳  
 と咽ひとバ忽ち創く泣まぶふぞとさ何とせんと思  
 惟小母を創ままといとせむば子創事兩つ小して身  
 ころ小迫るぬまどばとやまも一がやまのこころ小想  
 ひめらうもふととも兩をづる全らとて得はしむる

高野薙髮刀上

十一



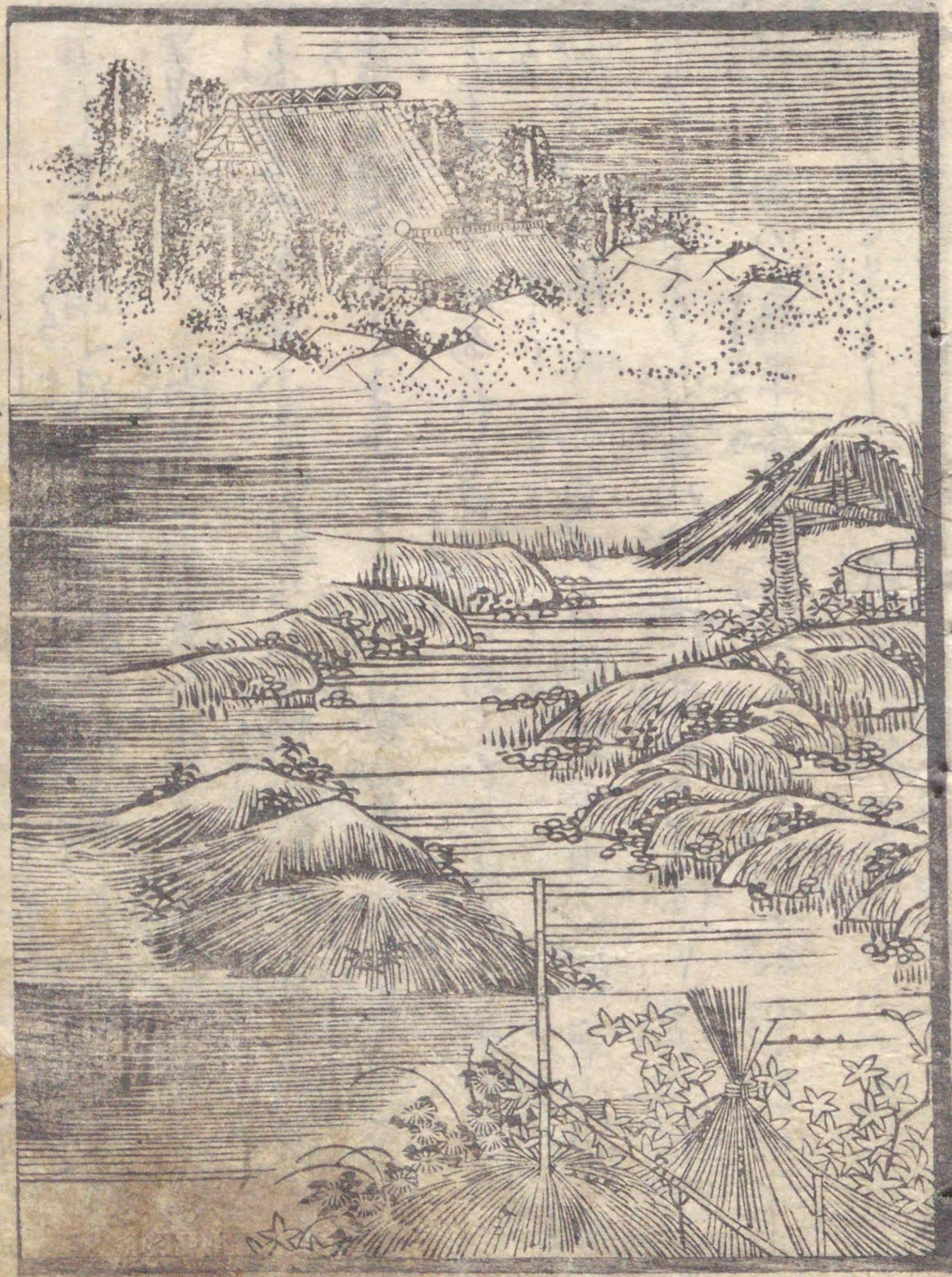


小親を易めども道にあしぬもの不便なれども此子と  
捨く母を養をやと心既小変めながらも生あるものど  
て子と想ふに親のなまひなる小もてや亡夫の遺  
念とて只此見むとありあると捨小行くとするあれ  
むいふ心強き人ゆのあををどと躊躇とであえこは  
少くも今日と暮ても免角小悔りぐらなる小母と  
子いよいよ創小望する小ぞ今はいや詮方なく自  
ら志を願ふ母小長谷の親音小祈やべることありて  
謁あでゆをりといひく二方小あうりたる我思小懐小

ついで立出はく涙あうら小此思ふ薄命の事とを想ひ  
けらるふつけ亡夫の言置たることを想ひ出し吾子  
今斯のことくなるとぞ若憐むふと人小捨れと成人  
の后いっちり出身をせんも量りまづるべうの亡夫の遺命  
小まうせ彼短刀を添へて拵人小生の親の遺留物と想  
ひ佩るる小なるあはれ夫の志望一りしと又  
立戻涙あうら小短刀をとり出し劍を治し縁故と幼親  
の生れ一年月とを写つけつら小此劍とをこの囊小  
納め泣く家を出行けり此夜は霜月十日あり









小して月清小風冷つぎあきらつかぜひやうづく肌を刺はり如くごとなりは啓ひらく暖あたたか  
着きる人ひとも尚なほ世よまどとおほゆる小こ菘あハ俵はたけ小こ百家ひゃくか  
衣きぬむとろを身み小こまよひたれハは猛とらちま骨ほね冷ひや手足てあしさへ凍こて一  
歩いっも進すすまなくさ小こここさらら最愛さいあいのをとり子こと孫ん  
とどむる途みちめれを只ただ決きふのこかさられて足あしのあららぬ  
綾あやもかく斬く切初はつ吏しの左側さわがは小こ長谷ながたにの觀音堂くわんおんどう小こ着  
小こ々々素すより小こ菘あハ此こ親おん世よ音ねを保く信一い奉ほうれハ  
頑がんく母ははの病やまひ平ひら愈いの行いハうけまりぬ今いま宵よもま何  
其そのことと先まと一いっ次じ小こ吾われ子この福ふくを祈らるやうハな小

や大悲たいひの山さん誓ちか言ごん小こハ枯かるる木き少すくも北きた咲さと云らる小こここそ  
所ところ佛ぶつハ靈れい驗げん他た小こ異い小こまま一いっままして坂東ばんとう巡めぐ礼らい弟てい四し番  
小こ日ひ々々せせふ原はらハ大和やまとの長谷ながたに小こ在あらると云義ぎ之の昔むかし  
洪水こうすいの鳥とり小こ流ながされぬいはるる此こ餅もち倉くらの馬うま入い川  
へ漂たふ着つるるいはしを飯山いひやまなりる忍しの性じやう法師ぼうしと大江おほ廣ひろ元もとと  
議ぎるる此こ地ち小こ安あん置ち一いっ奉ほうり今斯いま目め出い度ど栄えいへまし  
ままひひふふとふ此こ国くにの衆しゆ生じやうと濟さい度ど一いっめん方かた便べん  
ととそそ想かひまつつをひられを母が病と頓の愈し  
めひままくく只ただ今いま拵しなるる子こが身のくへ御佛おん小こああややる

高野薙髮の二

十三





ゆく護らせしと涙もふりて頼もなうて  
何處も拵むと叫寺の並なる人家の軒と東  
と徘徊躊躇ゆるうち三更の鐘うらうと音を  
ひ往來の人もたへて四方も寂寞ふたりの  
水瀬川の流るゝ寒く響き友小後と一鷹の力  
なく鳴度るしぞ歳分は哀れ添まらぬ  
ばいしむそそと涙あがく小紋子小乳房と會  
ませり云へりけるハ嗚呼いづかしの吾子や今ハ親  
子一世の離別あるふやあはれ飽まらぬ小乳とあはれ

おとむすまをば世の中おとむす親小縁あはれ  
あらまど俵二方小して父小死別今も母小死別誰  
養ふもそ人とならぬさ曙郊の稚子夜の雀替子  
を想ふハ生あるものなうひちかふまてや人と  
して只むすりの子を拵る母が心ハ鬼より蛇よりも  
恐ろしと必怨むるは是渾る世の因縁小して  
甲斐なれば奴家子と生れしこそ薄命なりし幼  
きこの小云んハよしあはれと小ハあれどつを  
止令まむすふいえるるをばあはれが為小ハ祖母奴家





か為小母なる人乳あつて命を保らぬを  
 こゝろわしてハ母人を飢えさせハ詮すか  
 憂事をも做つるぞと喫く咽くて嘆か  
 みてハ月を  
 みてらぬぬ光景なり小菘ハ漸く涙を  
 拭ひ顔て  
 覚悟のこゝろなれば心弱くて果せ  
 ばと自ら心と勵  
 けとある門内ハ吾子とて既小去  
 らんと折  
 う北風飒吹落ハ寒さ肌を空  
 穿てりハ  
 幼鬼  
 ハ猛り目と覺ハ呼と泣と小菘  
 慌忙く抱との声  
 たてさしと乳と含ませる悲と酷  
 慮とゆるく

涙とむせび抱きしり嗚呼憂物ハ道理  
 あり互示り  
 現とふと長と離別を做とのを木石  
 とて作り人ハ  
 もあきかたは泣むてあづさぞいふ  
 負苦小迫ハ  
 とて吾夫此妻ハ  
 かくハ嘆ハ  
 せまハ  
 あな煮ハの吾夫や惻らハの吾子  
 や口説たてつ  
 声と悲泣してぞ嘆きかりわら  
 ぬ哀と心な  
 夜更て門を小人の姑むと咎り  
 一犬吠ゆハ  
 ち小應ハ渾一般小吠く  
 起出集會  
 先景ハ





嘘的見付られどと吾恩を捨跡小心にむくれど詮せん  
なまふ位にも我屋をとりて飯りたり

才三 旅僧大士割小圃児を捨ふ

且説小なる我家の門をこまての飯来けきとも母の吾  
ふと問んとて何と答ゆとと暫し躊躇てありたる  
が斯くも果てふあり孤ををさくも裡小入まが母  
の安否を問んとその野所小行くとてふ豈料と  
と母の雨ふ斬と鮮血小まきととさくたりてあり  
るゆぞ愕然とさどろき氣も消心も乱と何と

くくくそのまき屍小ととせぐり毒のかどり泣沈と天小  
悲しと地小泣と既小絶入かまき後生て嘆さくハ嗚呼  
恨めりの世の中や現小孝行むらそのハ皇天恵とみひ  
福を降しとあて聞どそハ憚偽ふてやありかん奴家  
愚小して聖の道をあて体ども現と大事ふするらとハ  
露かこころとむさうれがらも親の為とて子と拵小行と  
跡とく母人のかく浅猿と非業の災を遂多ひハと  
ハそハ何の道理とと天を恨と世を嘆と此夜ハ終夜  
泣あしぬさても其夜も天明ありと小なる僕と

高野薙髮刀上

七五







強  
虚六平  
母  
害

高野薙髮刀

高野薙髮刀





小依み起も出づありける程小隣伍曹甚異し何  
事のありやうんと訪ひ来けるが小菘母の屍小纏は  
位居る光景を見て大小教馬をさういふ小  
の縁故を問ひ小菘泣く昨夜の一五十一を細  
小云聞ゆるり邑人ホその至孝のほど感  
薄命なる母が横死を憐れまづ人を長谷お遣  
幻見とて聞ひし小昨夜一人の高野沙門来  
り持るる幻見を拾ひ何方とてか  
ある小ぞ索べさ小由なくそ其怪小なり置老

母横死の光景を保正小告公訖及れども依を察ん小  
も證あり祓を空しく検屍官をうらるるのあて一件  
忽ち小濟たるほど小老母が屍を邑人の情とて終  
一条の綱をひきり斬りたる后小菘ハ正小是空を翔鳥  
の翼をとりてれ地をまき歎の足を断りたる小均  
身となりゆる小涙の乾くまもたなく熱く思惟  
後小一年も満ざる小親夫死別を子小生別  
丑小希ある薄命かそとが中おも母人小害  
非命小亡びぬる晦氣さやうか

高野薙髮刀

ガラス使用





者の業も知れぬハ雙と報ゆべしことと叶ぬは是禪  
と毒の因縁ありあるをりほどむとらハ前日高野沙門  
の云々ん刀の妖祟を傲もあらんかむくり祟るとの  
知りてばなむとて吾子小添で遣ふとて持とて親と  
道ハ失つる小禰までと移やらんとハ悲ひあまも浅檀  
奴家のまかくてあまも難面々々寧亡之の救めり末本の  
親や夫小見んとものとりと覚悟とまむとて又想  
らく斯まで罪障ゆき身は今死小たらんハ未  
のわども恐ろしとてハ厭ふとて小わくとて人の冥福

とバ誰とて吊ん我今よりして墨の衣小姿を云云入  
の菩提ハとありむと所少ハ我子高野沙門小拾と  
とととあまも彼市山ハヨ守行ハ親子再び環舎のとも  
あらんとと忽ち志を請へ日頃信ハ奉りハ長谷寺小  
詣て住侶の僧を頼むは緑の黒髪を切拂ハ菩提  
の道ハ入けるハ甚殊勝也賢々れ今此小虚六平  
ガ老母を害ハ立去りハそのハ何者ぞと想ふハ同  
郷の悪棍強ハめてぞとたり是何の故をりて老母  
を害せしとられば虚六平素ありとて彼短刀を

高野薙髮刀

二





乞索々れとも興へざりしを易くぬこと小想ひしこと  
虚六平も素武士なれは強く乞んハ利害いらんあらん  
と打るる如小近頃虚六平辞世はまハ心易しと喜ひ  
密小忍び入る彼口を奪んとせし小老母ハ驚たあ  
こまこと咎しを只一刀小斬殺し尚短刀を搜せ折る  
小菰の匂り来る小鷺さ後の方より走り去りし  
故下一頭却説兼日虚六平がもと小宿し高野沙門ハ  
何者小しといふ縁故をそとてころころそとを  
しは是高野山南谷南光坊の住侶小して仁海と呼

づそのありたり此僧博學秀才の知識して大師乃  
法燈をねが為小光りを添ふべきほどありたり  
山ハ故近国の道俗を敬ひぬゆる小齡不惑小及  
べれど學問小暇なく大師の跡と踏なぐ諸国行時  
のころいままで全たうぎやうし草年西国四国を  
回国しは今年ハ東国の霊場へ詣でんとて  
倉とるる虚六平の家ハ宿りたるをたうりさても  
海虚六平が家を辞し陸奥の方へ卦を周く霊場  
を巡礼してぬるさまを此縁倉とるる小長谷乃



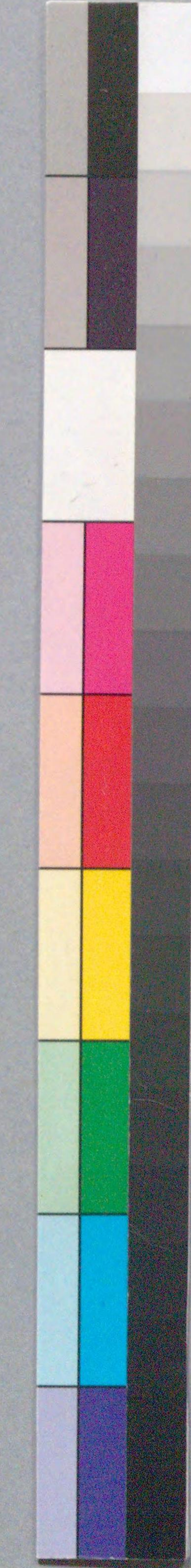


観音堂の最下運過くると紀日既小暮々ればと幸か  
 又今宵はく小通夜さんと佛の座敷小くく居る  
 終夜經を誦と称名してありける小三更小やあらんと  
 おぼしき左側正堂の最なる人家めて捨子ありとて  
 云もて騒ぶまじひなるわど小甚憐小想ひ其處小  
 往て看る小二三ちをりとおぼしく清らある男児  
 の賤しめざる一披の短刀を添て捨られたるゆを  
 かり母邑の投とて捨子ありとバ公小訴へを思ふと  
 是とて小ありけりも信回もその法のごとくんを

邑人の云つるを仁海うちやうりありぬと見とむげ  
 かくも思ふをさうんハ便ちと坐小愛患とやうとて  
 想ひなるハ我今此孤を養育てもりく僧ともちりた  
 衆許々の功德ちうんと邑人小包ひ普ひ得て此處にハ  
 将き去りぬとどいまい氣かしてハ養育誰さふはり  
 惱む免やせまじ角やせまじと想ふ折りく捨好夫婦  
 順礼の是も二三ちをりたる女児を俱くると道づ  
 とかりけるふと仁海心婚く親まらり物くくひる  
 因と聞小夫婦各りるハ小人ハ高野山の麓紙屋宿

高野薙髮の上

廿一





高野薙髮刀



仁芝海孫  
夫婦  
掃子



小住める孫次六と申すもの少て妻ハ尾花と叫ぶが數多見  
どもとてそとらふ近頃より續く悉く失ひ俵小此女  
梅見とりつると一人残の斯薄命やういふ世の作業  
悪して今生小報ひまると覺ふはほどふ罪障消滅の為  
且ハ亡子ともらう後世の爲東西の觀世音を巡礼し奉  
んと兼年西国がごとく順礼し今時東国を順礼  
只今飯路小赴ゆとありとありふ小仁海并ひ姓名を名告  
次小幼鬼の縁故を説話ありこれ同邦の好身小此鬼  
を伴ひ飯り四五方まで養育たひるんやとて

くも頼まばへつれば夫婦ハ仁海の芳名ハ預る所  
つ且孤と養はんや無量の功德ぞと想ひ子細を  
うけ列けし仁海とて喜ひ懐中より養牧の  
黄金を取出しと六とやう小いあまど幼鬼を供した  
まを驛路の貴多うらん小その償小あてると  
へぬる夫婦ハ固く辞て受とると多方小云く  
小云へて云我かられり信濃国善光寺へ詣でん  
へ此処あり別とあり程なく帰山して見念の時  
今日の好意を謝しと云小夫婦と云く云





おろまは此見のこととては露心ふとめめそで緩くそ  
ゆゑ我く夫婦より〜養ひ給へ〜そむつそ此見の  
名と何れ呼ばれんとも小仁海志なく考へてを  
つら〜此見素より名あつたれども捨られし其  
名を知ふ由かし成人やうての後吾大師の法流は  
汲めとりめ心をそそ汲とそそ呼べられしあれど  
汲と云ふ文字をとりて人の名小呼んも異ゆかたは  
訓同一くて目出度文字少のれを衆と云ふ字小  
易也〜とられより衆助とを呼ぶなりそも此

衆助をいふ人の子と想ふ小是虚六平うりて  
と〜と〜少で小菴う捨〜子あぞありけるおも仁海  
ハ斯のごと〜小約〜夫婦のよふ別とや〜  
信濃路〜とて赴きまゐり

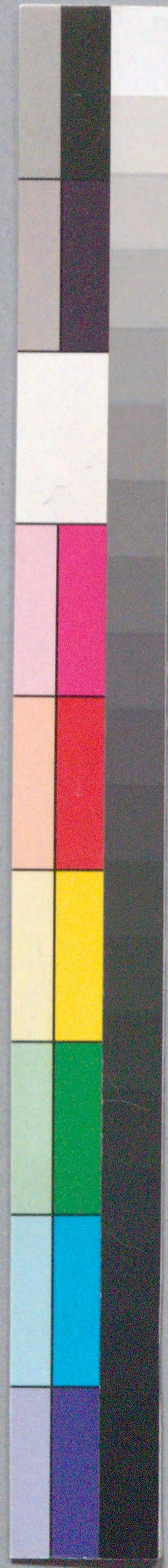
石川屋

高野薙髮刀巻上

松らる





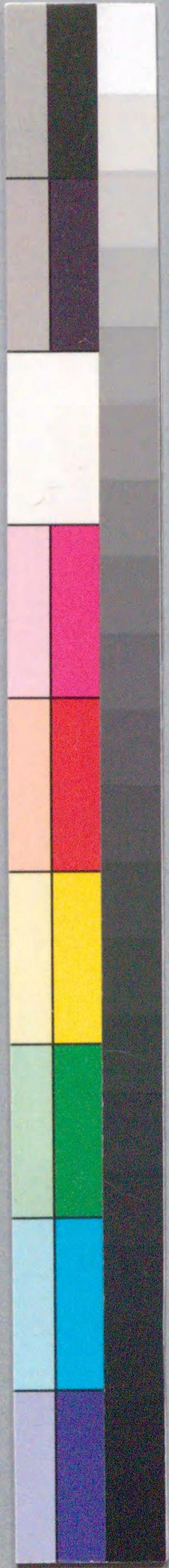


国立国会図書館 高野薙髪刀 2巻 208-697

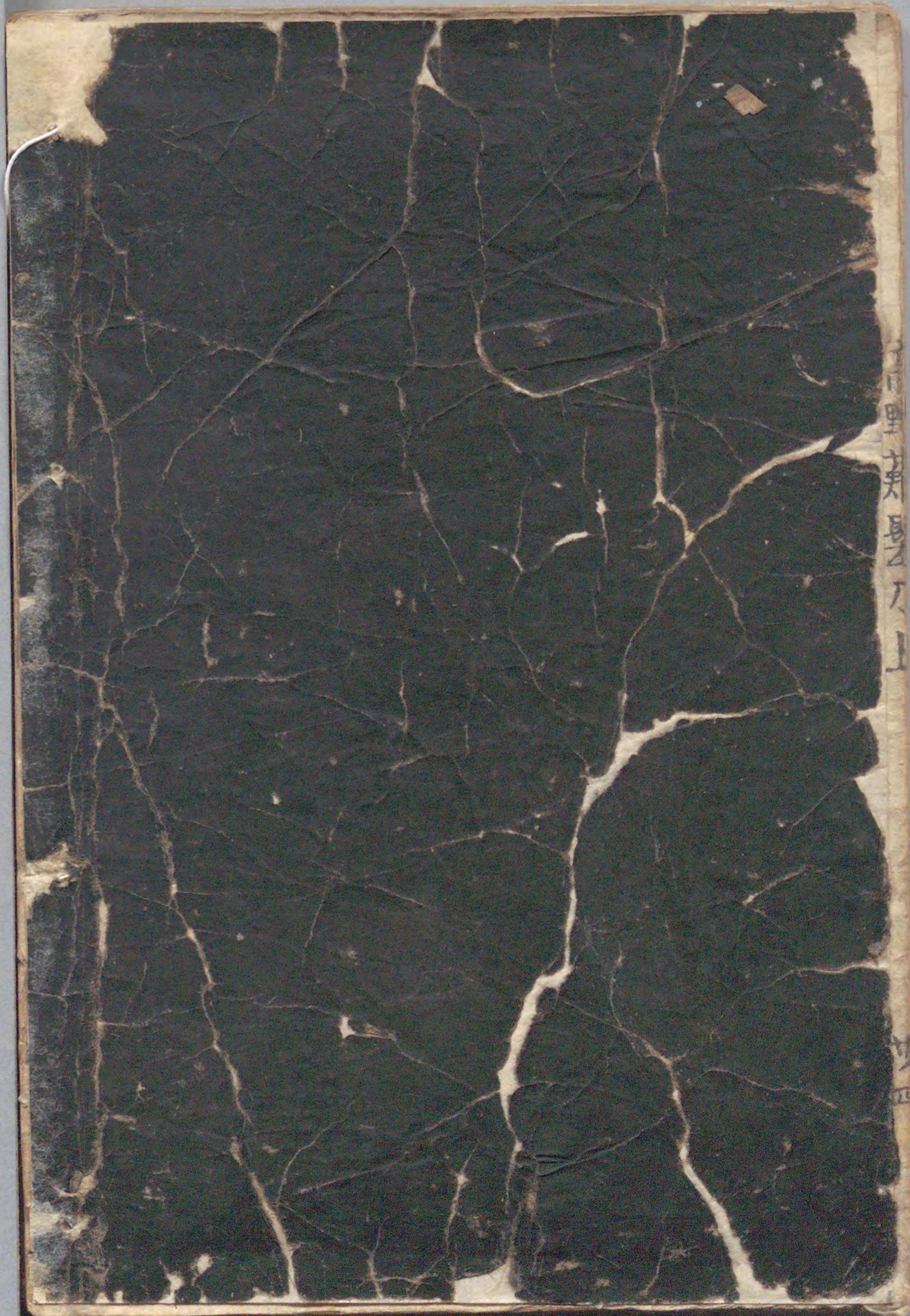
ガラス使用







国立国会図書館 高野薙髪刀 2巻 208-697



ガラス使用

